『さるのこしかけ』

宮沢賢治

みんなは縛ってしまうと、互(たがい)に手をとりあって、きゃっきゃっと笑いました。

大将が、向うで、腹をかかえて笑いながら、剣をかざして、

「胴上(どうあ)げい、用意っ。」といいました。

楢夫は、草の上に倒れながら、横目で見ていますと、小猿は向うで、みんな六疋位ずつ、高い高い 肩車(かたぐるま) をこしらえて、塔(とう) のようになり、それがあっちからもこっちからも集って、とうとう小猿の林のようなものができてしまいました。

それが、ずんずん、楢夫に進んで来て、沢山の手を出し、楢夫を上に引っ張りあげました。

楢夫は呆(あき)れて、小猿の列の上で、大将を見ていました。

大将は、ますます得意になって、爪立(つまだ)てをして、力一杯延びあがりながら、号令をかけます。

「胴上げぃ、はじめっ。」

「よっしょい。よっしょい。よっしょい。」

もう、楢夫のからだは、林よりも高い位です。

「よっしょい。よっしょい。よっしょい。」

風が耳の処でひゅうと鳴り、下では小猿共が手をうようよしているのが実に小さく見えます。

「よっしょい。よっしょい。よっしょい。」

ずうっと向うで、河がきらりと光りました。

「落せっ。」「わあ。」と下で声がしますので見ると小猿共がもうちりぢりに四方に別れて林のへりにならんで草原をかこみ、楢夫の地べたに落ちて来るのを見ようとしているのです。

楢夫はもう覚悟(かくご)をきめて、向うの川を、もう一ぺん見ました。その辺に楢夫の家があるのです。そして楢夫は、もう下に落ちかかりました。

その時、下で、「危いっ。何をする」という大きな声がしました。見ると、茶色のばさばさの髪(かみ)と巨(おお)きな赤い顔が、こっちを見あげて、手を延ばしているのです。

「ああ山男だ。助かった。」と楢夫は思いました。そして、楢夫は、忽(たちま)ち山男の手で受け留められて、草原におろされました。その草原は楢夫のうちの前の草原でした。栗の木があって、たしかに三つの猿のこしかけがついていました。そして誰(たれ)も居ません。もう夜です。

「楢夫。ごはんです。楢夫。」とうちの中でお母さんが叫(さけ)んでいます。